

「将棋作品をひもとく！ “読む将” のススメ展」
の実施報告について

- 1 開催期間：2022年4月29日（金・祝）～6月26日（日）
- 2 開催場所：町田市民文学館ことばらんど2階展示室
- 3 観覧者数：2,828人／49日間（1日平均57.7人）
- 4 協力：公益社団法人 日本将棋連盟

5 開催報告

近年、再ブームを迎えている将棋をテーマとした初めての文学展として開催しました。本展では、近代以降の将棋を題材とした文学作品の歴史を辿り、作家の直筆原稿や取材メモ、マンガ原画、愛用の駒などの多彩な資料を展示しました。時代によって変化してきた将棋の楽しみ方の変遷を追いながら、各時代に生まれた作品を紹介する展示構成とし、小説、俳句、マンガ、映画など様々なジャンルの作品を取り上げたことによって、幅広い層の方に興味を抱いていただくことができました。

将棋文学の面白さを伝え、日本の伝統文化である将棋の魅力をより多くの人に感じていただける機会となり、将棋好きの方はもちろん、よく知らない方にも作品に関心を持っていただくきっかけとなりました。

(1) 関連イベント

実施日	イベント名	参加人数
5月7日	<small>あしざわよう</small> 芦沢央（作家）×佐々木大地（棋士）対談 「将棋小説のたのしみ」	63人
5月28日	小谷瑛輔（明治大学准教授）講演会 「文学の中の将棋」	48人
6月11日	文学散歩～将棋会館周辺を歩く～	14人

(2) 主な資料

- ・近代作家の直筆原稿（織田作之助「可能性の文学」、井伏鱒二「阿佐ヶ谷将棋会」）
- ・マンガ原画（能條純一『月下の棋士』、伊奈めぐみ『将棋の渡辺くん』）

- ・ 山本崇一朗原作のアニメ『それでも歩は寄せてくる』(7月放送開始)の設定資料
- ・ 芦沢央『神の悪手』の取材メモや関係者との往復メール
- ・ 江戸川乱歩や中島敦、尾崎一雄ら作家旧蔵の将棋駒など、約200点を出品しました。

(3) パブリシティ

- ・ 朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、東京新聞、神奈川新聞等のほか、雑誌「将棋世界」、「東京人」等に掲載されました。
- ・ 会期中に当館 Twitter で「推し本」として展示作品をピックアップして紹介し合計で216,000を超えるインプレッションを獲得しました。
- ・ 「別冊少年マガジン」6月号に掲載された伊奈めぐみ『将棋の渡辺くん』の作中において、展覧会の紹介をしていただきました。

(4) 来館者アンケート

本展の特徴としては、50代が22%、40代が19%、60代が14%、30代が12%、20代が12%と幅広い年代が来館しました。男女比では男性が64%で、約93%の方から満足の評価をいただきました。

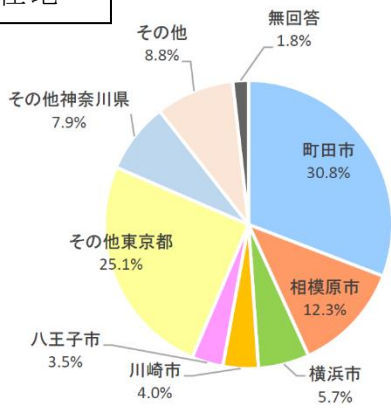
明治から現在までの文学作品をジャンルにとらわれず紹介したことで、知的好奇心が刺激された、作品を手取るきっかけになったといった感想がありました。

その他、来館者の主な感想は以下のとおりです。

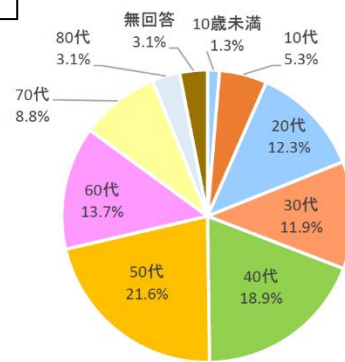
- ・ おもしろかったです。将棋とミステリーにあそこまで親和性があるとは思いませんでした。今時の流行もとりにれた、良い企画展で、キュレーションがとても上手だと思いました。(20代)
- ・ 特別将棋に興味があるわけではなく、なんとなく来てみたが大変面白かった。文士たちのたしなみであり、かつては庶民に広く愛されていたこと、それが今はマンガやミステリ等で親しまれていることが興味深かった。『神の悪手』は読んでみたい。(30代)
- ・ 作家の方の観戦記は、まさに文学作品というべきレベルの高さで胸を打たれた。明治から令和までの文学作品が一堂に会し、かつ堅苦しすぎず、見どころの多い展覧会だった。(50代)
- ・ 将棋はテレビで見るだけじゃないと強く感じました。将棋は推理小説に似ると乱歩が言った通り、将棋には盤上だけに収まらない魅力的なポイントが多数あり、その1つが文学として表れていることがよくわかるいい企画展でした。(10代)

アンケート集計結果

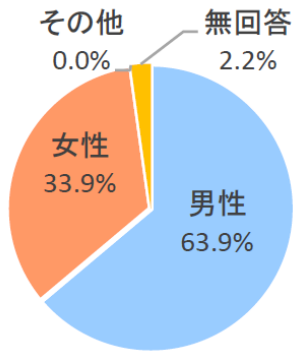
居住地



年代



性別



満足度

